

〔発言者〕 秋月辰一郎

〔発言年月日〕 1975 年 8 月

〔生年、被爆地、職業など〕 1916 年生まれ。長崎で被爆。医師。

〔内容〕

原爆記録映画が原爆後二十二年にして初めて上映された。その記録映画は原爆後二十日頃からの長崎、広島のもの
凄惨な破壊状況をつぶさに撮影した貴重なものであった。

それには人権という理由で人間の治療されている姿が抹殺されていた。

「何だ。人間がいない。」累々たる瓦と破壊物の砂漠もその破壊力のすさまじさよりも、むしろ単調すぎて退屈でさえあ
った。

「こんなのは原爆映画ではない。人間のいない被爆長崎、広島というものはない」という叫びがおこった。

その後になって、その記録映画に人間の治療の場面がつけ加えられた。背中一面に火傷して黒くあるいは白く化膿し
た負傷者、頭髮の抜けた哀れな放射能症の人、しかし、私はそれらを見ても、やはり「人間がいない」と感じた。

原爆における人間というのは、そのような個人や単数ではない。もちろん背中全面火傷の少年、脚の大きな傷の腐
った人、それらは原爆の激しさ、残酷さを物語っている。

しかし私たちが言う原爆の悲惨というのは、全面火傷、腐敗した傷の人びと、あるいはそれ以上の人びとの群れであ
る。それらの群れが地に充ち、川を埋めたのが原爆である。

（中略）

各大学から調査団が来た時、記録映画の始まった時はこの七万のうち、九〇％は死亡していたのである。

爆心より五〇〇メートルの人びとは即時に、一、〇〇〇メートル以内の人びとは一、二日に焼け、つぶれて死んでしま
った。これらの人びとの上にかんかと夏の日が照り、蠅がたかり、やがては雨に流される。

私はこの暗黒の日々のあとの時期について、どんな記録が出ようと、それは本当の原爆でないと叫ぶつもりである。
原爆後の一週間、爆心地から一、〇〇〇メートル以内は科学的記録や調査の届かない所にある。

被爆者の証言の意味はそれである。

〔注〕

アーカイブ映像が伝える原子野や、被爆後の写真映像が伝え得ない「暗黒の日々」の期間こそが原爆であるとの視点を
述べている。証言の替え難い役割をお手本をもって示している意義がある。「ナガサキ・歴史の暗点」からの抜粋。

（『広島・長崎 30 年の証言（上）』広島・長崎証言の会編、未来社、1975 年所収）